馬驍水墨画会報

発行所　馬驍水墨画会本部
〒一七〇東京都豊島区東池袋五－三九－一六グランドメゾン東池袋二〇二
TEL&FAX　〇三（三九八七）七〇八〇

1994,3,30
No.2

中国上海美術館主催

―在日芸術活動十五周年記念―

『馬驍水墨画展』四月二日上海美術館にて開催

馬驍先生の在日十五周年を記念する「馬驍水墨画展」が四月二日から八日までの一週間、中国国立上海美術館の主催で開催されることになりました。中国の美術館が国外の画家の作品展を主催するのは極めて異例のことです。馬驍先生は「中国で個展を開催するのは永年の夢でした。美術館の主催という光栄な形で実現でき、こんなにうれしいことはありません」と感激しています。

馬驍先生は、日本への留学経験を持つ中国人の父と、静岡県出身の母の間に一九四〇年、北京で生まれました。幼い頃から画家になる夢を抱き、国立美術学校に入学。王荻地先生の父で中国油絵の先駆者、王式廓先生（一九一一～一九七三）の画室で絵画の基礎を固めました。卒業後は中国美術家協会発行の雑誌「美術」の編集記者を務める傍ら、創作に励んでいました。

生後まもなくから日本国籍を有していましたが、母国の土を初めて踏んだのは一九七九年四月三日、三十八歳の時亡き父から遺言として託された高齢の母を扶養するためでした。

「帰国」から十五年。言葉や習慣の違いに苦労しながらも、試行錯誤の末に中国水墨画と日本画を融合した独自の水墨画を完成させ、各方面から高い評価を得ています。

今回の作品展は昨年六月に日中水墨画交流展を東京で開催したのがきっかけです。その際に来日した上海美術館の丁羲元副館長との間で「日中文化交流を今後もさらに推進したい」との話合いがなされ、その一環として開催の話が持ち上がりました。馬驍先生の作品を直に見た上海市人民政府文化局の干樹海副局長は「中国では見られない作品」と高く評価、上海美術館の主催事業として開催されることになりました。

作品展では、水墨画大賞を受賞した「暮色」（一九八六）や日本国外務大臣賞の「桂林月夜」（一九八八）、中国駐日大使賞の「漁光曲」（一九九三）など溌墨山水の原画二〇点のほか、リトグラフ十五点を展示。また、日中両国にまたがる馬驍先生の半生を綴った写真三〇点も展示。

また、開幕式には文化局長、美術処処長など上海市人民政府の幹部はもちろん、鄧小平氏の長女で、東方美術交流協会会長の鄧林女史、上海著名画家及び有名美術評論家、中央文化省中国美術家協会書記長雷正民先生、中国美術家協会『美術』雑誌副編集長・夏碩碕先生、国立中国美術学院院長・肖峰先生ら中国の美術関係者が多数参列する予定です。

開幕に先立つ四月一日には、記者会見も予定されており、現地の新聞や雑誌にも紹介されることになりそうです。

上海「馬驍水墨画展後援団」結成！

四月二日から上海美術館で開かれる「馬驍水墨画展」の開幕式に参加するため後援団が結成されました。田口婦美子団長、込山洋子副団長以下、青島俊介、林多景、中原智子、箱根妙子、山崎發江、田村とみえ、高野喜與子、目崎暢子、小川澄子、竹村トシ、久義好子ご夫妻、小林秀子、島田皓紀、渡邊芳子、山崎重之（敬称略）など二十一名が参加します。随行記者として毎日新聞記者高木諭氏、草加市役所広報課多田修氏も後援団に同行されます。

後援団の中には、当画会会員が多数参加されているので、中国呉昌碩芸術研究会の協力により三月三十一日（半日）に『花鳥画』、四月一日（全日）に『山水画』をテーマとして現在活躍されている中国有名画家による水墨画講座も予定されています。

また蘇州の名所旧跡や中国庭園を巡り、スケッチしながら中国南方の風情を楽しんでいただけるようにオプショナルツァーも設けました。

各支部積極的に活動中

東京第二支部展

（葛飾、江東、練馬、板橋）

葛飾区と練馬区で二回行われました。

第一回は、葛飾区の金町地区センターロビーで二月八日から十二日まで行われました。会場には、有名画家であり、アメリカ中国美術協会の常任理事である官其格先生と馬驍先生も来場。官先生は、会員がたの作品を高く評価し「十月にロサンゼルスで行われる会員展には、全力で後援させていただくつもりです」と語られました。また後援側である日貿出版社の編集員川崎氏も取材のため来場されました。

第二回は、三月十日から十三日まで練馬区立花と緑の相談所展示室で行われました。緑と美しい花に囲まれた環境で花を中心した作品を展示し思いがけず二〇〇人の方が御覧になり、大成功でした。

東京第一支部展

（台東、荒川、文京、足立、新宿、北、江戸川区）

三月十九日から二十六日まで馬驍水墨画展示館内で支部展が開かれました。支部長の呼掛けに答えて多くの会員が協力されました。出品者の中でも、とりわけ目崎暢子さん重富房子さん、杉木佳寿子さんらは、日頃から真剣に作品創りに取り組み、積極的に画会活動に参加されています。

ず取材のために来場され、会員がたの上達に大変驚かれました。また、日貿出版社編集部長水野渥氏も東京から駆け付けてくださいました。

期間中の四日には馬驍先生の講演会『水墨画の技法と創作』が行われ、当初会員のみ二十名の予定でしたが、会員以外の応募者も多く、総勢六十名以上の熱心な水墨画愛好家が参加されました。聴講された方は、みな馬驍先生の実演講義に感動され「多くのものを学んだ」と感想を述べられました。

静岡支部《黄山展》

三月三日から九日まで静岡市の『ギャラリーえざき』で「黄山スケッチ旅行創作五人展」と題して、黄山から帰国した静岡支部会員五名の作品のほか、旅行に参加されなかった静岡支部会員の作品と馬驍、王荻地先生の作品も展示さまました。

静岡新聞文化部副部長の山本英夫氏はご多忙にかかわら

千葉支部展

二月十六日から二十日まで市川市民談話室ギャラリーで行われ数多くの作品が展示されました。展示の飾り付けは難しくなかなか統一の取りにくいものです。今回は、支部長を始め、展示に手伝われた会員がたの努力によって、非常によくまとまり、きれいに展示することができました。

岐阜支部『実技講習会』

馬驍水墨画会岐阜支部の発足に際して、ご多用の中を馬驍先生にご来駕を仰ぎ、その記念として実技講習寺を平成五年十月二十三日に美濃加茂市中央公民会館において開催いたしました。

会員のほか県内各所より水墨画を学びたいと意欲を燃やす人たちが多数応募。定員をはるかに超え、断るのに大変なほどでした。

水墨画経験者は多くいましたが、今回のように講師が受講者の気持ちになって、丁寧で、熱意にあふれた講習を受けた人は少なく、受講者たちは一様に感激し、時間の過ぎるのも忘れるほど。馬驍水墨画会会員は申すまでもなく、他の受講者たちからも、今後もこのような講習会を望む声がたくさん出ていました。

支部としては、会員増や会発展のためにも順次、講習会を計画して行きたいと考えています。

（岐阜県支部長　林　多景）

《神奈川支部展6月予定》

今年の六月十五日から十九日まで、吉野町市民プラザギャラリーの大会場で開催することに決定いたしました。支部長の野島浅三さんは、現在積極的に展覧準備を進めております。展示目的の水墨画に関する意欲の向上と会員相互の親睦をはかれるよう、会員がたのご協力と力作を期待いたします。

旅の修研中国美術

レベル高い 黄山・桂林作品展

昨年の秋、馬驍水墨画会は「中国美術研修の旅」を企画主催し、中国水墨画の絶景である黄山と桂林でスケッチを体験する機会を設けました。

一週間にも満たない旅の中で、参加者四十六名は疲れを知らず、お互いに助け合い、お互いに学び、お互いの友情を深めました。また、名所旧跡や美術施設を見学し、黄山や桂林の山水画を創作するための題材も充分に収集しました。現地で開催された講習会にも全員、真剣な表情で臨んだほか、改革開放以来、著しい経済発展を遂げる中国の実情を視察するなど、たいへん有意義で忘れ難い旅となりました。

その成果のひとつとして今年一月下旬、『黄山・桂林スケッチと創作展』を開催しました。出品された三十八点からは、制作者の苦労や創作に懸ける真摯な姿勢が伺われました。創作レベルの高さは、今回の中国美術研修活動が大成功であったことを証明してくれ、出品者のみなさんがこの展覧会に全力を注がれたことに心より感謝申し上げます

（馬　驍）

より一層中国を好きに

王荻地先生と桂林スケッチ旅行

充実した旅でした。目的の桂林漓江下りは、午前十時出航。晴天に恵まれ、霧ひとつなく、足もとから全容を見せた、あの不思議な山々の、刻々と展開する景色に興奮の連続でした。雨に煙った絵にするには、適当にベールをかけて…などと考えながらスケッチやら写真撮影に夢中でした夜はお疲れのところを遅くまでスケッチの指導を続けて下さった王先生には深く感謝しております。

ショッピングも楽しく、同じ肌、顔に親近感を抱いてより一層中国を大好きになって帰ってきました。

また、旅行での作品を集めた展示会が、黄山スケッチ旅行の皆様の作品展とともに開かれると聞き、改めてあの感激を思い起こせるのでは、と楽しみにしています。

また、来年、上海で開催が予定されている日中水墨画交流展に参加させていただくことも今から楽しみです。

（千葉県支部長　山崎發江）

水墨画の神髄

今回の旅行では天候がすぐれず山並み一望に展開する黄山の雄大さを実感することはできませんでした。それでも翡翠谷、九龍瀑、文峰塔、練江岸など黄山独特の風景の片鱗は随所で見ることができました。そしてなにより、講義の際に馬驍先生から次のような御言葉をいただいたことが今回の研修で一番感動し、心に染みたことでした。

「私は黄山には7回訪れたが、今回の天気が最悪でしたしかし、水墨画の真髄は、写実ではない。『無』のところに忽然として巨峰、奇岩、怪岩が現れ、また瞬時にして目の前から消え去る。そして、再度、出現する。心打たれる黄山の生命をどうとらえ、どのように表現するか。悪天候の黄山でなければ会得できないものがある」カタコトながら誠意と熱意にあふれた御言葉をいただき私は感動するばかりでした。

敬愛する馬驍先生とテーブルをともにし、お酒を汲み交わしながら、馬驍語録の数々をいただくことができ、本当に実り多い旅でした。馬驍先生始め幹部の諸先生の誠意に触れ、関係者の方々の気配りを頂き、言い尽くせない思いです。今後とも心の糧として精進したく思います。

（中国地方支部　田中博）

抱いていた疑問も消えた

中国風景画について疑問に思う点がありました。聳え立つ山頂に見える奇様な建物、河川に浮かぶ古風な船、岸辺の鵜飼舟、そして、水辺に遊ぶ水牛、なかでも鵜飼舟や川舟は、水墨画の伝統的なアクセサリーにすぎないのではないか。そんな疑問でした。

午前十時漓江下りがスタート。船は澄んだ青空の中、静かに川を下ってゆく。左右に聳える山々は真に奇観、その雄大さに思わず息を飲む。シャッター音が激しくなる。走り去る風景の中、大急ぎでペンを走らせる。岸辺に奇妙な物が見えてきた。近付くと古風な川船の一団と鵜飼舟だ。小さな筏の上に五、六羽の鵜が乗っている。その先では水牛がのんびりと水につかっている。王先生のスケッチ指導に一喜一憂しながら終点の陽朔までの四時間二十分の川下りは、束の間という感じ。鵜飼船、水中、古風な川船が雄大な桂林の奇の中に溶け込んでいる様は、日本では想像もできぬ情景で、いつのまにか、当初、抱いていた疑問も消えていました。

私にとっては四十八年ぶり、妻にとっては初めての中国でした。親切な王先生のご指導のもと、良き同行の友に恵まれ楽しい旅でした。

（神奈川県支部長　野島　浅三）

黄山からの手紙

八年ぶりの中国。その目覚ましい発展ぶりに頭が下がる思いでした。お目当ての黄山にたどり着き、刻々と変わる山の風景や自然の造型の素晴しさ、松の姿に感動の連続でした。雨に煙る黄山も好きでした。

忘れられないもう一つのことは新しい賓館建設のため資材のセメント、鉄材などを運ぶ労働者の姿。観光客の間を縫うようにして運ぶ姿に大変な人間の力を思いました。

雨の中の翡翠谷や、一生懸命に登って見ることができた九龍瀑はいつまでも眺めていたい風景でした。職人の心意気が工場の中にみなぎっていた胡開文老の墨工場や、黄山空港で飛行機のタラップの上から仰ぎ見た仲秋の明月も心に残りました。

上海博物館では何百年の時を越えて発掘されたという工芸細工を丁義元先生の解説付きで拝見でき、その心遣いは感謝に絶えません。中国国慶節で賑わう町の風景にも触れ本当に楽しい旅でした。今も走馬燈のように頭に中を駆け巡っております。

（静岡県支部　小川澄子）

本会は水墨画の基礎と創作を重視し、流派を問わない自由な創作をモットーにしています。これに賛同されて自由に水墨画を楽しみたい方がこれ程多く入会されました。地方支部は現在、合わせて十を数え、支部展も活発に行われています。ぜひ各支部会員には、相互の語らいが充分に行われるように各支部長の呼びかけにご協力ください。

＊各支部からの便り＊

◆中国地方支部長・島田皓紀

昨年は秀作展、念願の楽しい黄山の旅もでき、とても有意義な一年でした。本年は新年早々創作展も開催、会員が増え、馬驍水墨画会が益々発展することを祈念いたします。

◆静岡支部長・田口婦美子

体が基本です。健康に留意して一日一日を大切に頑張りましょう。

◆東京②支部長・高野喜與子

第二支部の会員住所が離れており、支部展は二回行う結果となりました。皆様が真面目に気持ち良く参加くださり、素晴らしい会が持てましたことを心より感謝しております。

◆東京③支部長・渡辺芳子

生きとし生けるものが、生きることを歓び合える世の中で在りたいと願っております。

◆福岡支部長・藤原守

お陰をもちまして、福岡にも馬驍水墨画福岡支部の発足を見ることができました。

このたびは十数名の正会員（特別会員）で発足いたしましたが、幸いにも、他に七〇数名の準会員をかかえており、早晩、正式会員として皆様のお仲間入りの日も遠くないだろうと期待いたしております。

◆東京①支部長・安藤一明

馬驍水墨画展示館で東京第一支部グループ展を開催し、今後とも技術の向上と親睦を図っていきたいと考えています。

◆長野支部長・森杉志穂

水墨画は十五年ほど前から始めましたが、いい先生に恵まれませんでした。すばらしい馬驍先生に出会えて、一生懸命にやっていきたいとの思いを強くしています。また、知り合いにも教えてあげたいと思っております。

◆千葉支部長・山崎發江

千葉支部は、二月十六日から二十日まで市川市談話室ギャラリーで第一回の支部展を開きました。最大の収穫は会員22名のつくり出す「和」の妙味だったと感激をもって振替えっております。入場された多くの方からレベル高い会と好評でした。

◆岐阜支部長・林多景

岐阜支部会員一同は、本会の各事業には、率先して参加し、本会の発展に一致して協力して邁進することを誓い合い。今後の支部活動は、本部との連絡をいっそう密にして、水墨画会の限りない発展を切に望み、全会員の「和」を念じいたします。

◆神奈川支部長・野島浅三

今年は馬驍水墨画展示館三周年。それを記念するとともに、支部の親睦を図ることを目的に支部展を行う予定です。